

# 短 信

三

倉 橋 惣 三

## 季

春が来た。どこへ来た。——野がすつかり緑になり、花が満開に咲き盛つてからならば、誰れにだつて春といふことが心づきましよう。それでも季を知らない人があるならば、季へのあきめくらす。しかし、一體、季といふものは移りかわりをいふことで、その移りかわりにこそ季の味も趣もあるものです。一年を春夏秋冬の四つに分けて、それを一と仕切り、一と仕切りに區別するばかりが季ではありません。

季の中でも、冬から春への動き程うつり變りのこまやかなものはありますまい。春來り、つゝあるといふような洋風の言葉づかひや、忍び寄る春といふような情趣の言葉でも、到底いひあらはし盡してはゐない獨特の動きで、徐々に、しかもぐんぐんと力強いうつり變りを見せて呉れるではありませんか。暗さから明るさへ、澗さからうるほひへ、萎縮から開放へ。——それが、いつといふこともなく、ひろが

りもし、盛り上げて来るのです。空にひろがり、地に盛り上つて来るのです。

まだ冬といふ聲の中に、いつの間にか春の來てゐるものは、久方の空の光のたゞよひばかりではありません。庭の土の色、そこには一寸の處にまでもう春が盛り上つてゐます。森の樹々の膚のうるほひ、そこには一面に芽をふきそな春の力を漲らしてゐます。枯草堤とばかり踏みつけてゐた南の斜面には、御覽なさい、浮き出たような緑を吹き出してゐます。——熟した春には、染め上げられ、織り上げられた美はあつても、ほんとうの春の心はありません。春は春になろうとしてゐる動きの間のみあるといふべきです。

春の心は、春と共に動いてゆく心です。共に動きながら、その歩みの早さに驚かされる心です。驚きが感ぜられなくなつた時は、もう春の生命の無くなつた時です。その時、春は却つて淋しくなります。多感の人には悲しくさへなります。しかもそれは、動く春の思ひばかりではなくて、春の眞中に於て多く感ぜられるものです。或は、それ程でないとしても、屢々倦むような心になるものです。——そんな、不動の無氣力や、退嬰のはかなさの何處に、ほんとうの春の心があるものですか。次から次へ驚く心、次から次へ踊り進むような心、そればかりを春といふのです。

心なき所謂詩人の群が

家の戸口の春を見落して

春を探しに出かけてゆく

之れは、ほんとうの詩人が、似而非詩人を嘲笑つた言葉です。といふよりも、ほんとうの詩人が、いつも見なれた我家の戸口の前に、春の訪れを見出した言葉です。春は、どこそこにと探さなければ見つからないものではありません。どこへでも、いつの間にか、ちやんと來てゐるものです。たゞ私達が心づかないばかりです。假りに心づいても驚かないからです。驚いてもそれをすなほに受取らないからです。

自然の美といふ言葉があります。それは示されたまゝの自然の形、色、音に於て賞するところのものゝ意味にも用ゐられます。しかし、一番微妙な自然の美は、季の動きの中にあらはれる自然の美です。此の意味で、季の動きを感じることはなしに、自然の美を感じることは出來ないと言つてもいゝでしょう。立ち止まらせて、形をきめさせた自然に、眞の自然の姿はありません。それは無器用なレンズの上に焼きつけた影に過ぎません。自然の美は、その識らざる歩み、即ち季にこそあるといふものです。

此の季の動きを、子どもが意外によく感じてゐるものです。